

第115号

発行日：令和7年12月18日
発行者：医学研究科広報委員会
印刷：やまと印刷株式会社

弘前大学大学院医学研究科・医学部医学科広報紙

医学部ウォーカー

1面：「弘前大学 COI-NEXT Well-being イノベーションフォーラム 2025」開催
2面：医学研究科長、医学部長兼総務・教授就任にあたってのご挨拶
3面：学術報告第43回日本脳神経病学会学術集会ポスター賞／第1回スポーツ医学講習会を開催
4面：2025年病理夏の学校in弘前を開催して「医学部附属病院肥満症・栄養治療センター」設置／第8回 櫻井医学研究賞授与式
5面：特別賞を受賞して「教育に携わった業績を上げた教員」を受賞して
6面：解離性失神／休学学生支援方式／弘前大学医学部医学科スクーリングを開催
7面：「中・高生と医師との交流プログラム」検査部での体験報告／弘前大学大学院医学研究科公開講座「アルツハイマー病 新時代」／学生だより ハワイ大学夏季研修
8面：若手研究者紹介動画
9面：学生だより 米軍三沢病院夏季研修
10面：学生だより 台湾・長庚大学／英国大学医学部における臨床実習のための短期留学
11面：若手教員・医師だより／研究室紹介 分子病理学講座
12面：研究室紹介 眼科科学講座／総合文化祭（医学科展）を振り返って／OG-OG書籍出版物の紹介
13面：東日本医学生総合体育大会夏季競技を終えて／部活動紹介 バドミントン部・ソフトテニス部
14面：アントレ部／書籍のお知らせ／人事異動

題字 元弘前大学長 遠藤正彦氏筆

「弘前大学 COI-NEXT Well-being イノベーションフォーラム2025」開催

副学長・教授
グローバルWell-being総合研究所副所長
健康未来イノベーション研究機構長
村下 公一

令和七年九月十二日（金）、弘前大学は、青森県、弘前市とともに、シンポジウム「弘前大学 COI-NEXT Well-being イノベーションフォーラム2025」を一橋講堂（東京都千代田区）で開催しました。

まずは本フォーラムの開催にご尽力をいただきました学内外の先生方、参画機関の皆様、そしてスタッフとして運営にご協力をいただいた皆様に御礼を申し上げます。おかげさまで COI-NEXTの拠点として東京での開催は三回目となりました。

まずは本フォーラムの開催にご尽力をいただきました学内外の先生方、参画機関の皆様、そしてスタッフとして運営にご協力をいただいた皆様に御礼を申し上げます。おかげさまで COI-NEXTの拠点として東京での開催は三回目となりました。



基調講演（村下） 坂田先生 小宮山先生 浜内先生 松尾参与 千葉総括主査 藪崎さん 玉田先生 内野先生 井元先生 二宮先生 瀬川副 PL 桂木副統括 五十嵐先生 宮田氏 水野先生 石橋研究科長

パネルディスカッションの様子

分野第1領域 副プログラマオフィサー 吉田輝彦氏よりお言葉をいただきました。

基調講演では、私（村下）から「グローバルWell-being 共創社会の実現」と題して、これまでの弘前大学 COI-NEXTでの研究内容や成果、戦略、目指す社会等について講演させていただきました。

特別講演では、東京大学総長特別参事／大学院工学系研究科教授 坂田一郎先生をお迎えし、「弘前から発信する新しいWell-being イノベーションのモデル」と題して、Well-being 研究の最新状況や本学拠点に寄せる期待について、お話をいただきました。

続いて、COI-NEXT 共創の場形成推進会議 顧問／(株)三菱総合研究所理事長／プラチナ構想ネットワーク会長／東京大学第二十八代総長 小宮山宏先生から「プラチナ社会の実現と健康産業イニシアティブ」をテーマとして、健康産業イニシアティブの概況、再生可能イニシアティブの構想等にかける講演をいただきました。

著名な料理研究家・食プロデューサー 浜内千波先生からは「次世代に確かな味覚を繋げていくために」と題して、家庭での食育の重要性についてのご講演をいただきました。

Well-being Innovation Forum (TOKYO)

2025.9.12 FRI 13:00-17:15 (17:30-19:00)

一橋講堂・大ホール (千代田区一ツ橋2-1-2 第3ホール)

弘前大学 COI-NEXT Well-being イノベーションフォーラム 2025

弘前大学 COI-NEXT Well-being イノベーション P3 前期線 クロール Well-being 共創社会の創造

2025.9.12 FRI 13:00-17:15 (17:30-19:00)

一橋講堂・大ホール (千代田区一ツ橋2-1-2 第3ホール)

弘前大学 COI-NEXT Well-being イノベーション P3 前期線 クロール Well-being 共創社会の創造

2025.9.12 FRI 13:00-17:15 (17:30-19:00)

一橋講堂・大ホール (千代田区一ツ橋2-1-2 第3ホール)

弘前大学 COI-NEXT Well-being イノベーション P3 前期線 クロール Well-being 共創社会の創造

パネリストディスカッションでは、(株)宮田総研代表取締役社長／(株)ヘルスケアイノベーション代表取締役社長 宮田氏をモデレーターとして、COI-NEXT 共創の場形成推進会議 委員／名古屋大学大学院医学系研究科附属健康医療ライフデザイン統合研究教育センター 特任教授 水野正明先生をアドバイザーとして、私（村下）、医学研究科長 石橋先生、廣田先生、中野先生に加えて、生協学生委員会 藪崎さん、弘前市、セントラルスポーツ、カゴメ等産学官民の各分野からお招きしたパネリスト十三名の登壇者により「グローバルWell-being 共創社会の創造に向けて」をテーマにそれぞれの立場から発言いただき、熱心に議論が展開しました。

閉会に際し、石橋先生からご挨拶をいただき、当シンポジウムは大きな拍手に包まれ成功裏に終了しました。

今回の Well-being イノベーションフォーラムは、弘前大学 COI-NEXT 拠点三回目の東京開催の大きなシンポジウムとして実施をさせていただきました。無事に開催することができ、学内の先生方、参画機関の皆様はじめ関係皆様からいただきましたご指導、ご支援にこの場をお借りし改めて感謝申し上げます。皆さまの今後のご指導を賜りますようお願い申し上げます。



会場の様子

長崎県立大学
研究科
医学部
医学

第110回国立大学医学

部長会議に参加して

医学研究科長 石橋 恭之



て重大な懸念事項です。青森県は医師過剰には程遠い状況にあるものの、今回の議論では、近い将来、全国的に医学部臨時定員枠が削減される可能性が示唆されました。

一見無関係に見える、外国医学部卒の日本人学生への国試受験資格付与の問題、(4)ESTAによる医学生短期留学、(5)令和九年医学部臨時定員の配分、といった提案事項について活発な議論が交わされました。

会談後には、文科省高等教育局から「医学教育の現状と課題」(日比謙一郎医学教育課長)、厚労省医政局から「シームレスな医師養成に関する取組について」(中田勝己医事課長)、JACMEから「JACMEによる医学教育評価がもたらした成果と今後の課題」(奈良信雄常勤理事)、日本医学学会連合から「我が国の医学研究力向上にむけて」(門脇孝会長)の四名による来賓講演が行われました。

どの提案議題、講演テーマも、本学に深く関わる重要な課題であり、示唆に富むものでした。中でも医学部臨時定員配分枠(本学の現状は二十七)は、地域医療を担う我々にとって極めて

裕層の子が中心であることから、大半の医師が大都市圏に集中するという懸念をもちたっています。

こうした背景を踏まえ、

本学が医師偏在対策を臨時定員配分枠のみに依存することはできません。以前の医学部ウォーカーでも述べた通り、県内外から多くの優秀な学生が本学に入学し、研修医が県内に定着するよう、魅力的なカリキュラムと卒後臨床研修プログラムをより一層、強化・構築していく必要があると思います。

公益社団法人 医療系大学間共用試験実施評価機構 (Common Achievement Tests Organization)

一般社団法人 日本医学教育評価機構 (Japan Accreditation Council for Medical Education)

入などは日本有数の講座であることを示しています。弘前大学麻酔科がこれまで実践してきた研究と周術期管理をさらに発展させて特色ある麻酔科として歩みを進めて参ります。

伝統を大切に信頼される 麻酔科医の育成を目指して

麻酔科学講座 教授 斎藤 淳一



二〇二五年四月一日より、弘前大学大学院医学研究科麻酔科学講座教授を拝命いたしました。弘前大学麻酔科の伝統を引き継ぎ、更なる医療の発展と安定した地域医療へ貢献して参ります。

麻酔科学講座は、一九六五年に初代教授・尾山力先生によって開講された歴史と伝統を持つ教室です。その後、一九八九年から松本

教授就任にあたっての〆〆挨拶

医学医療情報学講座 教授 松坂 方士



医学医療情報学講座教授の拝命にあたり、改めて自己紹介を兼ねてご挨拶申し上げます。

私は岩手県稗貫郡大迫町(現・花巻市)の出身です。高校では一貫して医学部志望だったものの得意教科は

みならずスペシャリストとして何ができるのかであると思います。ひとりにひとつのサブスペシャリティーを、という合言葉のもとにさらに一歩進んだ医療を提供したいと考えています。

また、麻酔科では同時に働き方改革を進めていきま

す。麻酔科医も一人の人間であり、その人らしく働き、学び、家族との時間を大切にしながら成長するための環境は不可欠です。タスクシフト・シェアを活用し教室員の能力を最大限引き出すことができるよう努力いたします。これまでの伝統を大切にしながら、一人でも多くの患者さんに安定した医療を提供するために、そして、豊かな知識、確かな技術、柔軟な対応力を兼ね備えた「周術期管理」を実践できる麻酔科医の育成を目指して、診療、教育、研究、環境づくりに力をいれて参ります。今後どうぞよろしくお願い致します。

教授就任にあたっての〆〆挨拶

耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座 教授 鈴木 真輔



この度、令和七年十月一日付で弘前大学大学院医学研究科耳鼻咽喉科・頭頸

文系に偏っており、特に古文と漢文では三年間を通して学年でトップクラスでした。日本史も英語も文系の生徒に引けを取りませんでした。その一方で理系教科は不得意で、数学と物理は惨憺たるものでした。高校三年のセンター試験では頼みの綱の英語でつまずき、浪人が決定した時はこのまま大丈夫なのかと悩みました。ですが、その数日後に高校の離任式で聞いた日本史の先生のお話をきっかけに、文系思考ながらもそのまま医学部志望で頑張ろうという気持ちになりました。そのお話の主題は「なぜ、高校で日本史を学ぶのか」で、おおむね以下のよう

短期的には大学受験のために日本史を学ぶのだが、そもそもなぜ日本史が履修科目に入っているのだろうか。それを考える際に参考

になるのは昭和六年の陸軍大学校のカリキュラム改訂である。それまで陸軍大学校では専門科目を増やして一般教養を減らし続けていたが、俯瞰的で戦略的な思考ができない卒業生が増えた。そこで昭和六年に方針転換して一般教養を大幅に増やした。その後の卒業生が陸軍中核に進む前に戦争が終わったのでカリキュラム改訂の効果は不明だが、少なくとも専門科目だけでは思考の視野が狭くなるらしい。高校で日本史という一般教養を学ぶのは、広い視野を育てるためだ。

今になって考えれば、人の話は自分に都合の良いように勝手に解釈して聞くものだと思えるばかりです。その後も数学と物理が不得意な状態は続きましたが、二浪目の後期試験で弘前大学に合格することができました。

医療システムや情報通信技術の高度化に伴って、医療情報学分野は急激に変化しています。今後はその中心にありながら、本学の研究や医療の発展に貢献したいと考えています。

部とカールリング部に所属し、四季を通してスポーツに励む一方、音楽にも興味を持ち、歌曲やアリアなどを中心に小さいながらリサイタルを開いたこともあり

私は栃木県の出身で、一九九九年(平成十一年)に秋田大学を卒業しました。学生時代にはハンドボール

部とカールリング部に所属し、四季を通してスポーツに励む一方、音楽にも興味を持ち、歌曲やアリアなどを中心に小さいながらリサイタルを開いたこともあり

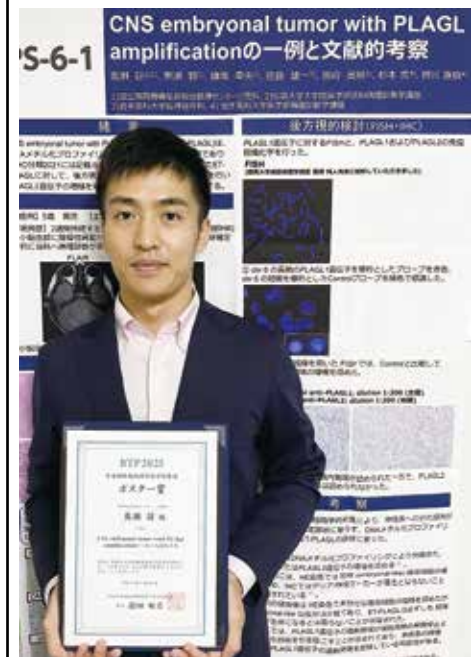
私は栃木県の出身で、一九九九年(平成十一年)に秋田大学を卒業しました。学生時代にはハンドボール

学部を卒業して岩手県立宮古病院での研修医の後、弘前大学に戻って大学院(社会医学講座)に進学し、学位取得後はロンドン大学キングスカレッジでがん登録・がん疫学を学びました。帰国後は佐々木賀広先生が教授を務められていた医学医療情報学講座に異動し、現在に至ります。

振り返ると、大学院以降は医学だけではなく法令や行政機構などの知識が必要な領域を学んできました。医療情報学も、行政からの指針やガイドラインを解釈してどのようにシステムに反映するのが重要な分野です。そのため、文書を読んではばかりのこれまでの経歴は高校生の時に既に決まっていたのかもしれない。(ただし、高校生の時には普通のお医者さんになることしか考えていませんでした。)

医療システムや情報通信技術の高度化に伴って、医療情報学分野は急激に変化しています。今後はその中心にありながら、本学の研究や医療の発展に貢献したいと考えています。

(次ページへ続く)



小児科学講座客員研究員の奥瀬諒です。このたび、第四十三回日本脳腫瘍病理学会学術集会において、ポスター賞を受賞いたしましたのでご報告申し上げます。発表演題は「CNS embryonal tumor with PLAGL1 amplification」という稀な小児中枢神経系腫瘍に関する症例報告で、組織学的特徴の検討および蛍光FISH法を用いたコピー

ポスター賞を受賞して

小児科学講座客員研究員 奥瀬 諒

受賞報告 第43回日本脳腫瘍病理学会学術集会

（前ページより）この「声」を通した経験が、その後に耳鼻咽喉科を選択するきっかけの一つになったものと感じています。また、最近各地のマラソン大会に参加することを楽しみにしています。弘前での生活では、これら趣味も通じて地域を深く知り、皆様と交流できる機会も増えることを期待しております。

秋田大学卒業後、私は同大学耳鼻咽喉科に入局し、秋田大学医学部附属病院を中心として臨床と研究に従事してきました。この間、大学院では頭頸部癌の進展機序を分子生物学的視点から研究し、二〇〇六年からの二年間は米国ピッツバーグ大学で分子標的薬を中心とした治療法の開発に取り組みました。これらの経験は私の専門分野の一つである頭頸部癌治療の礎となり、現在に至っています。また、秋田大学では、常に時代の先端とともに様々なニーズに応えるべく、新たな分野の開拓にも尽力しました。手術、化学療法、放射線療法、免疫療法に続く「第五のがん治療法」として注目され、世界に先駆けて二〇二一年に本邦で治療が開始された光免疫療法を東北で初めて導入したほか、全国的にも取り組みが少ない喉頭形成術を中心とする音声外科の立ち上げも経験しました。弘前の地においても、これらの経験を活かしながら耳鼻咽喉科・頭頸部外科診療の深化と国際化に努めて参りたいと考えております。

数解析結果をまとめました。本腫瘍は従来の組織診断では確定診断に至らず、DNAメチル化プロファイルリングにより分類される腫瘍で、PLAGL1遺伝子またはPLAGL2遺伝子の増幅を多くの症例で認めます。今回の発表では、本腫瘍の組織学的特徴を詳細に検討し、PLAGL1遺伝子の増幅をFISH法で確認できたことを報告いたしました。近年、脳腫瘍診断では組織学に加えてメチル化解析による診断・分類が重要となつていますが、費用や専門性の観点から一般診療での実施は困難な状況です。本研究では症例報告ではありますが、FISH法という比較

報告

第1回スポーツ医学講習会を開催

附属病院 整形外科 講師 熊谷 玄太郎

弘前大学附属健康未来イノベーションセンターにて、二〇二五年七月十二日に「第一回スポーツ現場の医学セミナー」を開催しました。企画・準備・当日運営は青森県スポーツドクターの会の津田英一会長（弘前大学リハビリテーション医学講座教授）が中心になって行われました。本セミナーは、二〇二六年開催の「青の煌めきあおも国スポ・障スポ」を見据え、スポーツの現場で求められる救護・救急対応の基礎を、広く学生・医療者・競技関係者に学んでいただくことを目的としたものでした。

予防行動・現場での評価・冷却の実践手順を解説しました。私が担当した救命・救急処置では、一次救命（BLS）の流れ、AED使用の要点、傷病者の安全確保や通報・搬送連携までを、実技を交えながら確認しました。受講者の中で救命・救急処置を経験したことがある方は一名のみでした。今後、実際のスポーツ現場で救命・救急対応を迫られるときに、本セミナーの受講経験が役に立ってもらえればと思います。

本セミナーは、青森県内の競技会や学校・地域スポーツ、さらには国スポ・障スポの現場で役立つ「いざ」という時の行動指針を、最新の知見とともに共有する試みです。講義と実技を往復する構成により、知識の定着と現場適応のイメージ化を促進できました。受講後アンケートでは「評価・判断のフローが整理できた」「AEDを実際に触れて不安が減った」などの声が多く、次回以降の継続的な開催に対する期待の声も寄せられています。

今後は、競技特性や気象条件、運営体制に応じたリスクアセスメントの実装、会場配置や導線設計を含む救護計画（EAP）の見える化、指揮系統・連絡手段の事前テストなど、現場での実効性をさらに高める内容の拡充を予定しています。地域の学生・医療者・指導者・ボランティアの皆様と共に、

青森から安全で質の高いスポーツ環境づくりを推進してまいります。今後青森市や八戸市でも開催予定ですので、是非興味がある方はご参加ください。



松田尚也講師講義風景：脳しんとうの認識と復帰判断の要点を解説。



山本祐司講師講義風景：熱中症予防対策の要点を解説。

森県内の競技会や学校・地域スポーツ、さらには国スポ・障スポの現場で役立つ「いざ」という時の行動指針を、最新の知見とともに共有する試みです。講義と実技を往復する構成により、知識の定着と現場適応のイメージ化を促進できました。受講後アンケートでは「評価・判断のフローが整理できた」「AEDを実際に触れて不安が減った」などの声が多く、次回以降の継続的な開催に対する期待の声も寄せられています。



集合写真：学生・医療者・競技関係者が一堂に会し、「現場で動ける」救護体制づくりにつながる学びを共有しました。



実技風景：頸椎カラー固定、搬送の仕方についてチームで反復練習しました。

報告

2025年病理夏の学校in弘前を開催して

分子病態病理学講座 教授 水上浩哉

二〇二五年八月二十三日、二〇二五年病理夏の学校in弘前を未来イノベーションセンターで開催しました。「病理夏の学校」は、日本病理学会やその地域支部が主催する集中セミナー・ワークショップです。対象者は主に医学部生、歯学部生、初期研修医、病理医を目指す若手医師、研究者で、病理医の実際を知り、病理研究や診断への理解を深め、少しでも病理医、研究者を増やすことを目的に行っております。東北支部では二年

に一度各大学持ち回りで開催しております。二〇二五年度は弘前大学が担当で、分子病態病理学講座の水上が実行委員長、旧病理生命科学講座の後藤先生が事務局長になり、準備、開催されました。約四十名の学生、引率者の先生に参加していただきました。弘前大学からは五年生の坂本君、二



川原さん、阿部君が参加してくれました。今年度は前日の夕方懇親会を佐和家で開催しました。やはり、アルコールの力は偉大で（もちろ

ん二十歳からですが）、初めて会った学生同士でも多くの会話がなされ、和気あいあいとした雰囲気が出されておりました。弘前の夜を皆さん楽しんでください。開催当日は、まずグループを作り、午後のCPCのためのスライドづくりを行ってもらいました。弘前大学の学生さん達は病理学実習で鍛えた知識を十分に発揮できたはずだと信じております。症例自体は事前にバーチャルスライドを回覧していたものの、なか

は大変そうでしたが、協力して課題をこなしていただきました。午前中は講演を中心としたプログラムが組まれました。北海道大学大学院の田中伸哉医学研究院長の特別講演ではこれまでの研究の道のり、特にハイδροゲルを使ったがん、再生研究についてご講演いただきました。非常にレベルが高く、我々の研究医意欲を強く刺激しました。また、

後藤先生から「病理医への道のり」、秋田大学と岩手大学の先生から「若手病理医からのメッセージ」、弘前大学出身で市立函館病院の病理医である棟方哲先生から「病理医からのメッセージ」という題でご講演いただきました。現場の先生方の生の声（いいことも悪いことも）は、将来病理医を選択するにあたって大きな示唆になったのではないかと思います。また、午後はグループ別に学生さんによるCPCの発表を行いました。苦勞のかいあり皆さん素晴らしい発表でし

医学部附属病院肥満症・栄養治療センター設置

内分泌代謝内科学講座 教授 藤田征弘

このたび、医学部附属病院院長のご厚意により「肥満症・栄養治療センター」が五月十四日付で院内措置センターとして正式に認可されました。また、七月十四日には、設置趣旨や活動内容、今後の展望等について各テレビ局・新聞社などに記者発表（プレスリリース）を実施いたしました。

本センターは過栄養および低栄養に伴う患者の治療に多診療科・多職種連携のチーム医療として貢献することを目的に設置されました。センター長を私が務め、副センター長は、消化器外科・乳腺外科・甲状腺外科の室谷隆裕先生と栄養管理部副部長（併任）の柳町幸先生が務めます。さらにセンター設立・運営には、精神神経科、消化器内

科、放射線科、リハビリテーション部、形成外科、薬剤部、看護部、栄養管理部など多くの部門の先生方・職員の皆様にご協力をいただいております。青森県は成人の肥満率が全国平均を上回っています。また、肥満に起因しないし関連する糖尿病や動脈硬化性疾患、悪性腫瘍などの罹患率や死亡率が高く、全国でも上位を占めています。「肥満症」は、脂肪が体内に過剰に蓄積した状態である「肥満」に関連する健康障害（十一項目）を合併するか、その合併が強く予測される「疾患」で、医学



的に減量が必要とする病態です。現在青森県におきまして肥満症診療の現状を鑑みると、減量・代謝改善手術の施設基準を取得した医療機関がなく、弘前大学が先頭になってこの分野の治療に減量が必要とする病態です。現在青森県におきまして肥満症診療の現状を鑑みると、減量・代謝改善手術の施設基準を取得した医療機関がなく、弘前大学が先頭になってこの分野の治療

内唯一の内科治療・外科治療が行える肥満治療センターとして県民の健康増進や寿命の延長に寄与することが期待されます。一方で、過栄養だけでなく様々な疾患を要因とする患者の低栄養状態は、患者のQOLを低下させるだけでなく、入院の長期化により医療経済への影響も及ぼすことから、「栄養治療」が今後一層必要とされています。NST（栄養サポートチーム）など附属病院の栄養治療体制と連携して、早期離床、術後QOLの改善、術後合併症の減少、入院期間の短縮を目指していきます。

今後とも、センターのさらなる発展のために、皆様のご指導とご鞭撻を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

第8回 櫻井医学研究賞授与式

医学研究科長 石橋恭之

櫻井記念医学研究賞は株式会社丸大サクラキ薬局からのご寄付を原資として平成二十九年度に設立されました。今年四月二日、本研究賞の設立者である櫻井清会長が急逝されました。この場をお借りして、ご生前の多大なるご貢献に深く感謝すると共に、謹んでご

冥福をお祈り申し上げます。本賞の目的は、国際的医学研究による研鑽を通じ、大学院医学研究科及び医学部附属病院における研究者の育成、青森県の地域課題である短命県の返上並びに将来にわたる地域医療の更なる発展に資する事業を支援することにあります。特別賞は一件三百万円以内、若手奨励賞は一件百万円以内としており、選考に当たってはこれまでの国際共同研究の実績のみならず、今後の研究計画を厳正に審査し、受賞者には研究論文を成果として求めることにしております。



第八回目となる今年度は四月に公募を開始し、特別賞に一名、若手奨励賞には四名の応募がありました。研究推進委員会における厳正な選考の結果、特別賞には医学部附属病院高度救命救急センター助教 今智矢先生の「超解像顕微鏡で明らかにする多系統萎縮症の発症早期病態」が、若手奨励賞には附属病院泌尿器科助教 成田拓磨先生の「新規ヒアルロン酸分解酵素」が贈呈され、福田学長並び

（次ページへ続く）



このたびは第八回櫻井記念医学研究賞 特別賞を賜います。誠にありがとうございます。大変栄誉ある賞を頂戴し、心より光栄に存じます。株式会社丸大サクラハ薬局の櫻井様をはじめ、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

今回受賞の対象となった研究テーマは「超解像顕微鏡で明らかにする多系統萎縮症の発症早期病態」です。多系統萎縮症は、多系統の神経系が障害され、発症から約九年で死に至る予後不良の疾患です。αシヌクレインというタンパク質がニューロンおよびオリゴデンドロサイトに異常蓄積することが神経変性に深く

特別賞を受賞して

附属病院 脳神経内科

助教 今

智 矢

（前ページより）
に櫻井英男様よりお祝いのご挨拶を頂きました。各受賞者からは受賞対象となった研究に関して、詳細な説明がなされ、最後に参加者全員で記念撮影を行い、授賞式は終了いたしました（図）。

今回、成田先生から、第一回櫻井記念医学研究賞若手奨励賞が泌尿器科の米山徹助教であったことが紹介されました。この時の課

題が「SA糖鎖構造を標的とした新規前立腺癌診断法の国際多施設臨床試験」であり、この研究が弘前大学発の前立腺がん診断の新規診断法「S3PSA®検査」につながっております。研究成果がこのように臨床に結び付くことはそう簡単ではありませんが、若手の皆様も是非本医学研究賞に申請し、研究を進めていただきたいと思ひます。

関与していると考えられています。発症機構は未解明で、現在も治療法は確立されていません。国の指定難病であり、青森県内にも百数十名の患者さんがいらっしゃる。ことから、脳神経内科医にとっては決して稀な疾患ではなく、当科でも多数の患者さんを診療しております。

私たちは日々の診療を通じて、この疾患の治療につながる知見を得たいとの思いから、病態解明に向けた研究を継続してまいりました。特に、発症早期は進行期に比べて治療効果が期待されること、また病初期の状態を捉えることで早期診断への応用が可能であることから、近年は発症初期の病態に焦点を当てた研究に力を注いでいます。

従来、光学顕微鏡の分解能を超える微細構造の観察には電子顕微鏡が用いられてきましたが、試料作成・観察が煩雑であること、生細胞には応用できないこと、多重染色することができないなどの制約により、

令和7年度「教員に関して優れた業績を上げた教員」を受賞して

泌尿器科学講座 准教授 山 本 勇 人

この度は、栄誉ある「教育に関して優れた業績を上げた教員」として表彰いただき、大変光栄に存じます。様々な形でご指導・ご支援いただいた皆様に心より御礼を申し上げます。

私の主な教育活動は、大

分子病態の解明には限界がありました。これに対し、超解像顕微鏡は光源や空間制御技術の進歩により、電子線を用いずに数十nmの高解像度で観察が可能となった革新的な技術であり、開発者らは二〇一四年にノーベル化学賞を受賞しています。私は研究留学中に、世界に先駆けてヒト脳組織標本を用いた超解像顕微鏡による研究に取り組み、多系統萎縮症におけるαシヌクレインの微細構造に注目してまいりました。本学には超解像顕微鏡が配備されていませんでしたが、このたび、本学共用機器基盤センターおよび本研究科に超解像顕微鏡が導入されることになりました。そこで、本学脳神経病理学講座およびカナダとの国際共同研究を通じて、最新鋭の機器を駆使して多系統萎縮症の病気の始まりの変化を捉える研究をさらに推進したいと考えております。

本賞の受賞を励みに、目の前の患者さんにとって希望の光となるような成果を目指し、今後も診療・教育・研究に一層尽力してまいります。

まず臨床前OSCEについてですが、基本的臨床手技の領域で数年間評価者を担当させていただき、二〇二四年度よりチーフを担当させていただきます。前任の漆館教授のサポートの下、サブチーフをはじめ担当教員・サポートスタッフの皆様にも多大なご協力をいただき、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。基本的臨床手技は、侵襲的な医療行為や医療安全に関わる重要な領域であり、学生が特に緊張しやすい場面です。そのためコミュニケーションを取り、安心して取り組める雰囲気づくりと、要点を明確に伝えることを心がけています。最近では指導動画も充実し、学生の理解も格段に早くなりました。自分の学生時代を思い出しながら教育の進化を実感しています。今後もチーフとしてわかりやすく実践的な教育を



目指してまいります。

次に臨床実習についてです。泌尿器科の五年次実習は以前二週間でしたが、現在は一週間に短縮して行なっています。限られた期間ではありますが、手術と透視療法に重点を置いた、密度の高い実習を心がけています。手術実習ではロボット手術を通して最先端の医療技術を体験してもらい、生体腎移植を通じて移植医療の魅力を感じてもらっています。透視療法では、鷹揚郷腎研究所弘前病院での見学・実習を通じて、地域医療の現場に触れる機会を提供しています。

当講座は新体制となつてまだ日が浅いですが、若さを生かしたフレンドリーで活気ある雰囲気や学生にも好評なのかもしれません。今回の受賞は、こうした講座全体の教育体制をご評価いただいた結果ではないかと感じております。

最後になりますが、このたび御推薦くださった関係各位に深く感謝申し上げます。また、日々支えてくださる泌尿器科学講座の皆様にも心より御礼を申し上げます。今後とも御指導・御鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

附属病院 耳鼻咽喉科頭頸部外科

講師 後 藤 真 一

この度は、「教育に関して優れた業績を上げた教員」として表彰をいただきました。誠にありがとうございます。非常に光栄なことであり、今後も精進を重ねてまいりたいと思ひます。

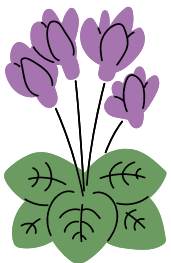
私が担当している講義は三年生の研究室研修、四年生の耳鼻咽喉科頭頸部外科学における外耳・中耳疾患、内耳性難聴、神経耳科学の講義、更に臨床前OSCEにおける頭頸部診療実習のチーフを担当しております。

これまで研究室研修では岩木健康増進プロジェクトで得られた平衡機能や聴力データの解析を指導してまいりました。研究室研修は学生時代のうちに研究の一端に触れるという非常に貴重な機会です。よって学生には、この経験を通して研究に対するポジティブな気持ちを持ってもらえるよう、心掛けて指導してまいりました。しかしながら、もちろんすべてがうまくいくわけではなく、初めから解析をやり直したり、せっかく作成したスライドが赤ペンだらけになってしまったりと、大変な経験もさせてしまったかと思ひます。更に今の学生は英語で発表が必須となっており、とても厳しいものとなってきておりますが、学生と一緒に少しずつ研究結果をまとめていき、無事発表が終わったときには非常に充実感のあるものとなっております。

一方、耳鼻咽喉科頭頸部外科学の講義の中で特に耳の領域は解剖が非常に難しく、更にその疾患概念もなかなか理解しがたいものが多いです。多くの学生のうちに講義の内容をすべて完璧に理解するのは非常に難しいものと思ひます。私が当初より気を付けていた点は国家試験の過去問が解けるような授業をすることです。過去問を通じて、難しい耳の領域においても最低限覚えてほしいところを強調して講義するようにしております。

最後に臨床前OSCEですが、今は機構より学生に診察方法の動画が配信されているため、その動画を勉強するだけでも十分かもしれません。その中で対面授業がある理由として、なぜそのような診察方法が必要なのか、またきちんと評価される診察ができているかを教えることに意義があると考えております。あくまでOSCEに向けた練習ではあります。少しでも将来臨床で行うことがイメージできるように気を付けております。

これまで教育の専門家ではないにも関わらず、授業を行っていただくことに少し不安感もありましたので、この度の受賞は非常にうれしく思ひます。今後もおこることもなく、少しでも学生のためになる授業をできるよう励む所存です。この度は本当にありがとうございます。



令和7年度 弘前大学医学部 解剖体慰霊祭

生体構造医学科学講座 教授 下田 浩

弘前大学医学部および同附属病院において系統解剖、病理解剖、ならびに法医学解剖のために御遺体を捧げられました御霊に対して弔意を捧げるため、弘前大学医学部解剖体慰霊祭が令和七年十月七日午後一時三十分より弘前文化センター大ホールで挙行政されました。慰霊祭にはご遺族四十六名ならびに本学白菊会会員二十一名の方々にご臨席賜り、また各方面から多くのご来賓をお迎えし、医学科および保健学科の教職員と学生が参列してしめやかに執り行われました。式に先立ち、弘前大学医学部管弦楽団による献体者慰霊のための演奏が行われ、会場全体が厳かな空気に包まれました。まず初めに医学の教育と発展のために本学にご献体いただきました御霊三十七柱に対して参列者全員による黙祷を捧げ、ご冥福をお祈りいたしました。続いて、ご献体なされまし

設に献体者名簿を納め、黙祷と代表献花を行う予定でしたが、全国各地と肩を並べるように当墓地公園を含め弘前市近辺でも最近熊の出没による人的被害が多発していることから、参拝者の安全を図るため今年度の慰霊施設参拝は中止となりました。非常に残念なことではありますが、後日関係者のみで参拝し献体者名簿を慰霊施設に納め、慰霊を行いましたことをご報告いたします。



令和7年度 秋季学位記授与式

医学研究科長 石橋 恭之

令和七年九月三十日(火)に弘前大学創立50周年記念会館みちのくホールにて、令和七年度弘前大学及び弘前大学大学院 秋季学位記授与式、医学研究科学学位記伝達式が執り行われました。修了者の皆様、学位取得まことにめでとうございました。

当日の式典には秋季修了者十三名のうち七名の方が出席し、福田眞作学長より代表者に学位記が手渡されました。今回の医学研究科修了者の全員が社会人大学院生でしたが、診療業務をこなしながら、実験の計画



から実施、データ解析、論文作成、そして論文アクセプトまでの作業と、その道のりは大変なことだったと思います。弘前大学のディプロマ・ポリシーによると、『弘前大学は、変化が激しく、将来予測が困難な

令和7年度 弘前大学医学部医学科 スクーリングを開催

―地域医療を担う医師をめざす受験生へ―

入試専門委員長 上野 伸哉
(脳神経生理学講座 教授)

令和七年八月七日(木)十三時より、弘前大学医学部基礎大講堂にて「令和七年度弘前大学医学部医学科スクーリング」を開催しました。

本スクーリングは、主に総合型入試(地域枠)による受験を希望する高校生を対象に行われたもので、当日は多数の受験生と保護者の皆さまが参加しました。

冒頭では、弘前大学医学部の紹介動画(<https://www.med.hirosaki-u.ac.jp/web/movie.html>)を上映し

た後、石橋恭之医学部長による講演「弘前大学医学部の歩みとこれから」

2. 富田泰史学務委員長による「弘前大学における医学教育」

3. 上野伸哉入試専門委員長による「弘前大学総合型選抜の概要」

が順に行われました。また、青森県健康医療福祉部からは「弘前大学医師修学資金制度」についての

説明があり、参加者は熱心に耳を傾けていました。総合型入試は、すべて「地域枠」での募集となっており、「青森県内枠」と「北海道・東北枠」に分かれています。出願要件として共通するのは、卒業後ただちに青森県のキャリア形成プログラムに沿って臨床研修を含む九年間(うち四年間は医師不足地域)で医療に従事することです。

また、青森県の奨学金制度は、手上げ方式を採用しており、希望すれば募集枠にかかわらず支援を受けることが可能です。総合型入試で合格した学生の皆さんには、入学後も青森県からの支援体制のもと、安心して充実した大学生活を送っていただきたいと願っています。

最後に、猛暑の中、本スクーリングの実施にご協力いただいた青森県健康医療福祉部の皆様、ならびに本学教職員・事務スタッフの



と、ここで十一月五日に行われた大学機関別認証評価の訪問調査では、機構から医学研究科大学院の修業年限内での修了率の低さが厳しく指摘されました。大変お忙しいとは思いますが、指導医の先生方におかれましては、大学院生の計画的なご指導をお願いしたいと思います。

時代にあってこそ力を発揮できる主体的・能動的な探究者を育み、高い倫理観をもつて知的探究に取り組むための三つの力を身に付けた者に対して学位を授与する」とあります。それは、①学際的な教養と高度な専門性を身に付け、学術的観点から自然や社会を見通す力、②学術的な知識を具体的な実践へ移し、国際社会や地域社会の問題を解決していく力、③常に新しい問題に挑戦し続け、生涯にわたって自らを成長させていく学び続ける力、の三つからなります。学位取得にあたっては、所属講座の教授をはじめとする教員の方々のご指導、また、ご家族や周囲の方々の支えがあったものと思います。今後は後輩の学位取得へのアドバイスなど、指導的立場を担わ



コラム 医学部 こぼれ話

今回は、現在検討が進んでいる「学生の新カリキュラム」と「統一試験」について、少しこぼれ話してみたいと思います。

医学部教育の最終的な目的は、いうまでもなく「良い医師となるための基盤を育むこと」です。しかし、短期的な目標として「国家試験に合格すること」が重要であるのも事実で、これについて説明は不要でしょう。

では、医学教育が国家試験の予備校のようになっているのか?と聞かれれば、私は断固としてNOと言いたいところです。ただし、合格率で評価される現状を踏まえると、一定の専門学校化は避けられないのも現実です。

そこで現在、カリキュラムの全面的な見直しと、統一試験の導入を検討しています。新カリキュラムが学生のニーズに合致するのか、統一試験をどのように運用するのが適切か、課題

は多くありますが、「リサーチマインドを失わず、かつ国家試験合格率も向上できる教育体制」を目指したいと考えています。

統一試験になると、採点は総合点で評価されるため、たとえ一つの科目が〇点であっても、他の科目で補えば合格となる方式です。これについて賛否はあるようですが、世の流れに乗る必要があるのかと避けて通れない方向性かと思えます。ちなみに、統一試験になると、これまでの「仮進級(一単位のみ不足など)」は、今後なくなる可能性が高いと考えられますのでご注意ください。

もちろん、詳細はこれから決まっていくため、現時点では不確定な要素も多々あります。しかし、皆さんのご意見が未来の方向性を形づくれます。ご希望・ご要望があれば、どうぞお気軽にお寄せいただければ幸いです。



皆様に心より感謝申し上げます。

「中学生と医師との 交流プログラム」 検査部での体験報告

附属病院 医療技術部 部長 石山 雅大

このたび「中学生と医師との交流プログラム」において、臨床検査技師として一つのセクションを担当させていただきました。

私たち医療技術部検査部門では、採取された血液や尿、体液を自動機器で測定する検査や、顕微鏡を用いた鏡検による観察、さらに採血や心電図などの生理検査について紹介しました。その後、検査部内を見学し、鏡検実習を体験していただきました。鏡検実習では、実際の血液標本を観察し、正常な血液像



と骨髄像、さらには病的な骨髄像（AML例）も提示しました。中学生の皆さんは、細胞の違いやその診断

の重要性に大きな関心を示してくれました。また、尿沈渣検査では潜血や白血球の増加、円柱などの異常所見を観察し、非侵襲的な検査から病気を推測できることを説明しました。実習の中では「本当に体の中にこんなものがあるのですか？」と驚きの声があがり、顕微鏡を覗く眼差しはとも真剣でした。小さな細胞の姿が病気の早期発見や治療の大切な手がかりになることを伝えると、皆さんが熱心に耳を傾けてくれたのが印象的でした。

今回の交流を通じて、中学生の皆さんに医療の世界の一端を知っていただき、医療職の多様性に触れていただけたことを嬉しく思います。これをきっかけに医療や科学に興味を持ち、将来の進路を考える際の参考になれば幸いです。未来の夢につながる第一歩となることを願っています。

開催報告

令和7年度弘前大学大学院医学研究科公開講座 「アルツハイマー病 新時代」

医学研究科広報委員長
先制医療学講座 教授 三上 達也

令和7年8月29日に、弘前大学大学院医学研究科公開講座が、弘前大学医学部講義棟にて開催されました。今回のテーマは「アルツハイマー病 新時代」で、講師は脳神経内科学講座講師 西島春生先生、同講座教授 富山誠彦先生、神経精神医学講座准教授 富田哲先生です。富山先生のご協力もあり、今回はこれまで以上に幅広く周知し、学内の教職員にも門戸を広げ、皆様の関心が高

かったこともあり、総勢百四名もの方にご参加いただくことができました。ありがとうございました。

西島先生からは、今回の公開講座の導入として「認知症って何？軽度認知障害って何？」と題し、認知症と、その前段階である軽度認知障害（MCI）の概念と病態について、また、アルツハイマー病とアルツハイマー型認知症の違いについて、一般の方にもわかりやすくお話いただきました。

令和7年度 弘前大学大学院医学研究科公開講座

参加料 無料

アルツハイマー病 新時代

認知症に関する話題を、3人の専門の先生方にご講演いただきます。

講演後、参加市民の皆様からの質問にお答えします。

正しい認知症の知識を得て、悩みを解消してみませんか？

日時 令和7年8月29日 18:00~20:00

場所 講義棟（弘前市本町53 大学院医学研究科内）

司会 三上 達也（医学研究科広報委員長 委員長）

講師及び演題（講演時間：1人30分）

- 講演1 「認知症って何？軽度認知障害って何？」
西島 春生 医学部附属病院 脳神経内科学 講師
- 講演2 「アルツハイマー病になつた終りの時代の終わり」
富山 誠彦 医学研究科 脳神経内科学講座 教授
- 講演3 「認知症になって困ることは何？困らないためにできることは？」
富田 哲 医学研究科 神経精神医学講座 准教授

申込先

申込先

申込先

学生 だより

学生
だより

ハワイ大学夏季研修

ハワイ大学夏季研修を通して

医学科三年 野呂 漱之

今年の夏季休暇にハワイ大学の研修プログラムに参加してきました。このプログラムでは、PBLやハワイの医療事情の講義など米国式の医学教育を体験する

題に入っていました。近年、話題になっている新規アルツハイマー病薬についてご紹介いただき、参加者も興味津々に聞き入っていました。

「認知症になって困ることは何？困らないためにできることは？」と題して、認知症の周辺症状（BPSD）について詳しくお話いただきました。参加者の中には、実際に認知症の方と接している方も多くいたと思われ、認知症に付随する症状と、その対処法に

は、向こうが汲み取ってくれたおかげでどうにか研修を終えることが出来ました。やはりどこに行っても自分で何かしようという行動することが大事なのだと改めて実感しました。

ハワイの医療事情では、離島などでは専門的な技術を持った医師、機材などが不足しているため本島に患者が移動したり、定期的に医師を派遣したりといったことが行われていると聞きました。大学の講義でも何回も聞いたような話であり、ハワイでも日本でも僻地では同じような問題を抱えているのだと学びました。これまで僻地医療に対しては、現場で働いて貢献したいと考えていました

今回の研修ではPBLや医療面接の練習を中心に授業がありました。特にPBLは初めての体験でした。臨床をイメージした課題は、自分が今で医学部でやってきた知識のアウトプット方法とは全く異なるため、他の人たちが様々な意見を言う中で発言することが難しかったです。しかし色々な方向から症状の原因を探るということを他の人の発言から学ぶことができた。次第に自分の考えも出てくるようになりました。

アモンドヘッドに行ったりとアクティビティを楽しむ時間も多かったです。ハワイ大学の学生と話す機会も多く、とても有意義な時間を過ごせました。アクシデントがあった時もすぐく話に変わりました。

日本とハワイの医学部は学生の経歴やカリキュラムの面で異なる部分が多く、とても刺激的でした。大学に入学してから自分と似たような境遇や考え方の人と過ごす時間がほとんどに

ハワイ大学夏季研修

医学科三年 西山 野乃子

最初に、我々学生を歓迎してくださったハワイ大学の先生方、JABSON students、そして、様々な

面で尽力してくださった弘前大学の先生方と大学学務の職員方にお礼申し上げます。

今年の夏、私は青く澄んだ大海洋を超えてハワイへ短期研修に行きました。研修には大学、学年、男女問わず二十人ほどの学生らが参加していました。彼らとは研修をともにするだけでなく、食卓を囲み、狭い車内で身を寄せ合い、短くも濃密な関わり合いを持ちました。



先進的かつ開放的なハワイ大学の校舎で、聴診器の（次ページへ続く）

ハワイ大学夏季研修

医学科三年 釜田 奈於

(前ページより)
扱い方や注射の実践など様々な経験をさせていただきました。

特に感心したのがハワイ大学の取り入れられている授業方式です。弘前大学では、殆どの授業が講義であり、生徒が互いの学びを発表し合うことはありません。しかし、ハワイ大学では講義とPBL双方の授業によって医学を学びます。PBLでは僅かな患者の情報をもとにハワイ大学の医学部生であるJABSON studentsや研修の他の仲間と患者の注視すべきデータ、予想される疾患、すべき検査と処置をチームで考える実習を行いました。



今回の研修で行ったことは将来医師として働く上での糧になりました。

ハワイ研修を通じて

医学科三年 尾崎 真理奈

ハワイ研修では多くの貴重な経験をさせていただきましたが、中でも特に印象に残っているのは医療面接の練習です。日本ではOSCEの際に医療面接を行います。今回はそれを早い段階で、しかも英語で体験することができました。

先生から「問診で診断の七割が決まる」というお話を伺い、医療面接の重要性を改めて実感しました。練習の際は、決められた質問項目を漏れなく聞くことに精一杯でしたが、実際には患者さんの回答から情報を引き出し、頭の中で鑑別を絞り込む力が求められることを学びました。また、質問するだけでなく、患者さんをより良い方向へ導く助

ハワイ大学夏季研修を終えて

医学科四年 井上 慶紀

八月二日〜八月九日において、参加させていただいたハワイ大学夏季研修について報告させていただきます。初めの二日間は、ハワイで働かされている日本人の先生方にレクチャーをしていただきました。先生方は、どんな質問にも気さくに答えてくださり、先生方の謙虚な姿勢と、周りを包み込むような熱意、温かさ、将来自分が医師、一人の人間として追いかけていくべき姿でした。ある先生の「Serve Others」という、利他的な心を忘れないで、というお言葉が非常に印象に残りました。

八月四日からのJABSONで過ごした五日間は、毎日新しい体験の連続でした。英語でのPBLは、普段の自分の勉強の仕方を見直す機会となりました。JABSONの生徒たちが、実際の臨床現場でどのように活用するかを常に意識して、医学を勉強していることを肌で感じました。また、ハワイ大学の教育は、医学の科学としての側面と同等か、それ以上にアートとしての面を大切にしています。医療面接の練習の際は、ドアのノックの仕方から始まり、患者との距離、目線、声かけをとても重視していました。これからの病院実習でも、このようなアートの側面を忘れずに、患者さんに接していきたいです。

ハワイ大学夏季研修を終えて

医学科四年 小野 真子

二〇二五年八月一日から十日まで、ハワイ大学で行われた夏季医療研修に参加しました。語学学習や海外医療に以前から関心があり、将来医師としてどのように成長していきたいかを考えるきっかけを得たいと思ひ、参加を希望しました。

印象に残ったのは、参加者同士で行った注射の練習です。注射を打つ際には、相手に実際に侵襲を与えるという緊張感を強く感じました。また、患者役のときには相手の初めての注射を受けることになり、医療行為を受ける立場としての不安や期待も実感しました。この経験から、技術だけでなく、医師と患者との信頼関係が安心感に大きく影響することを改めて学びました。

次にPBLを行った際に印象に残ったのは、ハワイ大学の学生の知識の幅広さでした。医学的な知識はもちろん、日本語に堪能な学生もおり、地域医療やハワイの医療制度についても深い理解を持っていました。その姿を見て、医師として専門分野に限らず、社会や地域の背景を踏まえた広い視野を持つことの大切さを感じました。

また、同じグループの日本人学生の英語力にも大きな刺激を受けました。医学英語を的確に使いこなし、日常会話でも自然に意見を交わす姿を見て、自分も今後さらに英語力を磨き、積極的に学んでいきたいと感じました。

ハワイ大学夏季研修を終えて

医学科五年 神田 武瑛

今年の夏、ハワイ大学夏季研修に参加させていただきました。本プログラムには、入学前からは是非とも参加したいと考えており、今回念願叶って参加することができました。プログラムでは様々な体験ができましたが、特に英語を用いた医療面接や診察、気管支鏡や腹腔鏡のシミュレーター実習などが印象に残っています。また、現地の医学生とも交流する機会が多くあり、様々なことについて話す機会がありました。その話の中で特に印象的だったのは米国と日本の医学部教育の違いについての話です。日本の医学部では講義中心の教育が行われており、教員の講義を教室で聞

き、それについての試験を受けるということが一般的です。一方で米国、ハワイ大学ではProblem based learning (PBL) が中心で、講義はほとんど行われず、学生が主体的に学ぶスタイルがとられているようです。講義もあることにはありますが、対面参加は任意で、後で動画配信サイトより倍速等で見ることも一般的とのことでした。現地の学生は非常に能動的で、学習意欲の高さに感銘を受けました。彼らとの交流を通してより一層、医学に対する学びの意欲が高まりました。このような貴重な機会を与えてくださった関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。

ハワイ研修2025

医学科五年 河本 草吾

今回のハワイ大学での五日間の研修を通して、貴重な学びと多くの刺激を得る

ことができました。現地ではディスカッションや講義(次ページへ続く)

第12回

若手研究者紹介動画

医学研究科では、各講座で研究されている40歳未満の若手研究者に、現在取り組んでいる研究内容や、研究を志したこれまでの経験を自ら紹介いただくことで、他の若手研究者や学部学生の研究に対する意欲を養うことに加え、紹介した若手研究者自身のモチベーションを向上させることを目的として、「研究者紹介動画」を作成・公開する取り組みを始めました。

第12回目は消化器外科学講座の鶴田 覚(つるた さとる)先生。『胆膵癌オルガノイドによる個別化治療研究』についてご紹介します。



助教 鶴田 覚
(消化器外科学講座)

医学研究科ホームページで公開中!

紹介動画はこちら ↓



(前ページより)

だけでなく、学生たちの日常生活にも触れる機会があり、その自由で主体的な学びの姿勢に強い印象を受けました。また、昨年弘前大学で経験したPBL (Problem Based Learning) と同じ形式でPBLが行われていたことも印象的でした。ディスカッションの進め方や問題解決のプロセスが共通しており、疾患に対する考え方やアプローチが国や言語を超えて共有されていることを再確認しました。

にも直面しました。単なる医学英語の使用だけでなく、模擬患者を相手にした実技形式のワークでは、訴えを汲み取り、適切に質問や声掛けを行うことの難しさを痛感しました。海外で医療を学ぶことの意義と魅力を改めて実感する研修となりました。

また、日本の他大学や現地の学生との交流を通して、多様な価値観や学び方に触れることができ、同じ医師を志す仲間として刺激を受けました。お世話になった先生方と学生の皆さんに心より感謝申し上げます。

ハワイ研修2025

医学科五年 毛利 惇一郎

今夏、ハワイ大学夏季研修に参加させていただきました。非常に充実したプログラムで、新たな視点や刺激を得ることができました。

参加理由には、医学教育における日本と米国との違い、臨床留学の実態、そして現地学生との交流を深めたいという点がありました。



た。これらすべての目標を達成できましたが、中でも現地学生との交流は特に新鮮な経験となりました。ハワイ大学の学生の皆様には非常にフレンドリーに接していただき、深く感謝しております。また、日本の大学を卒業し、ハワイで活躍されている医師の方にお話を伺う機会にも恵まれ、日本人が米国で医師になることの難しさとその実態について具体的に知ることができました。



さらに、日本の他大学の学生とも交流を深めることができ、その繋がりが今でも続いていることは大きな財産だと感じています。プログラムの中で特に印象的であったのは診察シミュレーションです。患者さんとのコミュニケーションを特に重要視する点に、日本との大きな違いを感じました。聴診や身体診察に

学生だより 米軍三沢病院夏季研修

米軍三沢病院夏季研修を振り返って

医学科五年 西 雅人

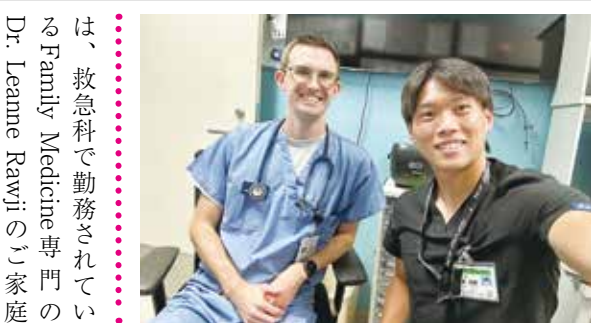
今回の米軍三沢基地病院実習では、Urgent Care、眼科、家庭医療、精神科を見学し、米国医療に触れることができました。精神科では派兵後のPTSD患者の診察に同席し、医学的側面だけでなく社会的・医療経済学的視点の重要性を学びました。Urgent Careでは、punitive damagesの存在を背景として訴訟リスクを意識したカルテ記載や音声認識を用い

た効率的な記録など、日本との違いを体感しました。また日本人フェローの先生から、基地外病院への搬送時の対応、キャリア形成について伺えたことも貴重でした。

語学・文化面では、軍医が階級を持つ軍人でもあることから、厳格な上下関係や規律を観察し、異文化での振る舞いを学びました。さらに米国四軍間の関係性を体験できたことも印象深く、ホーム

スティー先の Maakestad さんとは近所の方々の温かいホスピタリティに支えられ充実した毎日を送りました。米軍病院では軍人・軍属が無料で医療を受け、来院者は健康な成人が中心であるなど、米国社会の代表ではありませんが、その上でも米国の医療の一端触れることができた経験を今後のキャリアに活かしていきたいと考えます。

最後にはなりますが、実習を実現してくださった皆様、受け入れて頂いた米軍関係者の皆様に心より感謝申し上げます。



は、救急科で勤務されている Family Medicine 専門の Dr. Leanne Rawji のご家庭にホームステイさせていただきました。ご主人の Dr. Adam Rawji も同じく医師であり、お二人からアメリカにおける医師のキャリアパスについて貴重なお話を伺うことができました。またお二人のお子さんやワンちゃんとも遊んだり、みんなで三沢市内のレストランにご飯を食べに行ったりと、病院実習後も充実した時間を過ごすことができました。

五日間という短い期間でしたが、書ききれないほど多くの学びと気づきがあり、大変充実した時間となりました。最後に、この研修に関わってくださったすべての方々に心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

三沢米軍基地での研修を通じて

医学科六年 上野 裕貴

夏季休業期間の五日間、三沢米軍基地病院で実習に参加しました。もともと英語が好きで、将来的に海外で医師として働くことにも関心があったため、現地の医療の実情を見て、日本との違いを学びたいと思い参加を決めました。

基地の中に入ると、街並みや雰囲気があるアメリカそのもので、日本にいることを忘れてしまうような感覚を覚えました。病院では救急科、一般内科、小児科、眼科など幅広い診療科を回り、診察や処置の見学

に加えて講義も受けるなど、多角的に米国の医療を学ぶことができました。実際に問診も取らせていただき、これまでの実習で学んだことを活かす良い経験となりました。印象的だったのは、どの診療でも患者一人一人に十分な時間をかけ、丁寧に対応していたことです。患者数が少ないことも関係しているかもしれませんが、その分じっくりと向き合う姿勢が感じられ、説明の仕方や言葉の選び方がとても参考になりました。また、今回の実習で

この度実習の機会をいただき、受け入れてくださった天内さん、ホームステイ先の Dr. Passey さん家族、日本人フェローの方々、そして各診療科でご指導くださった皆様は心より感謝申し上げます。

私はもともと英語に興味があり、昨年度休学し、オーストラリアでワーキングホリデーを経験しました。英語にはある程度慣れていたつもりでしたが、今回、医学英語の壁に直面しました。初日から専門的な英語でやりとりするのは大変でしたが、言い換えて説明してくださったり、拙い英語ながらも学びを深めることができました。

診療科見学では、精神科と産婦人科が特に印象に残りました。精神科では、ア

難しく、自身の英語力の未熟さを感じました。ですが五日間の英語漬け生活を経て、研修が終わる頃には聞く能力、表現する能力共に向上を感じることができました。日常会話における表現だけでなく、医学に関する専門的な語彙や表現を身につけることができ、大変勉強になりました。ホームステイ先では、アメリカンスタイルの生活を体験することができました。日本にないながらもこうして文化の違いを体験できるのはこの研修ならではの機会であり、貴重に感じました。

この研修を通してお世話になった全ての方々へ感謝申し上げます。ありがとうございました。

三沢米軍病院で得た学び

医学科六年 澁谷 真呼

ルコール依存症患者の自助グループに参加し、断酒だけでなく「飲酒に責任をもつ」という立場からも議論がされていた点が新鮮でした。産婦人科では、避妊法の豊富さや診療中にオーブに避妊を話題にする医師と患者の距離の近さに驚き、日本との違いを強く感じました。

また、初めてのホームステイでは、一日かけて庭で肉を燻製にしたりカードゲームをしたりと、温かいご家族に迎えられ、少しだけアメリカの生活を体験できた貴重な思い出になりました。短い期間でしたが、日本の違いと英語の課題を体感し、多くの学びを得る実習となりました。

三沢米軍病院夏季研修に参加して

医学科六年 杉澤 尚帆

八月に三沢米軍病院にて五日間の夏季研修に参加させて頂きました。三沢市は、私の地元十和田市とも隣接し、幼少期から慣れ親

しんだ土地です。一方で米軍基地に関しては、基本的に軍関係者のみの立ち入りが許されているため、そう簡単に出入りすることができず、憧れの場所でもありました。また、米軍基地の中の病院での仕事内容や生活における基地の外との違いに関しても興味深く思っておりしました。

実習では、アメリカ式の外来の様子から手術の見学まで幅広く見学させて頂きました。ネイティブ同士の会話を聞き取ることは大変



難しく、自身の英語力の未熟さを感じました。ですが五日間の英語漬け生活を経て、研修が終わる頃には聞く能力、表現する能力共に向上を感じることができました。日常会話における表現だけでなく、医学に関する専門的な語彙や表現を身につけることができ、大変勉強になりました。ホームステイ先では、アメリカンスタイルの生活を体験することができました。日本にないながらもこうして文化の違いを体験できるのはこの研修ならではの機会であり、貴重に感じました。

この研修を通してお世話になった全ての方々へ感謝申し上げます。ありがとうございました。

学生
だより
台湾・長庚大学**台湾での臨床実習を通じて感じたこと**

医学科六年 加賀 巧 真

二〇二五年六月から七月にかけて、台湾のChang Gung Memorial Hospitalで循環器内科と総合診療科の実習に参加しました。英語で問診や身体診察を行うことは難しく緊張の連続でしたが、言葉が違ってもしっかりとした本質は同じだと感じました。



循環器内科では一日に沢山の件数のカテーテルアップ。総合診療科では訪問診療や健康教育に同行し、家族や外国人ケアギバーが患者さんを支える台湾の医療文化に触れることができました。地域の方々が楽しそうに健康づくりに取り組む姿も印象に残りました。

台湾での臨床実習を通じて感じたこと

医学科六年 倉本 莉 名

二〇二五年六月九日から七月四日まで、台湾の林口長庚記念病院で臨床実習を行わせていただきました。前半二週間は救急科、後半二週間はリウマチ・アレルギー・免疫内科を中心に実習を行いました。

長庚記念病院での臨床実習に参加して

医学科六年 小部 泰 嗣

台湾の文化・食べ物が好きで、さらに五年生の実習の際、台湾からの留学生と仲良くなったことがきっかけとなり、六月からの四週間、台湾・林口長庚記念病院にて臨床実習をさせていただきました。

整形外科と脳神経外科を各二週間ずつまわり、整形外科では外傷・スポーツ整形に加え小児整形や関節手術を、脳神経外科では覚醒下手術など多様な症例を見学し、三十件近い手術から多くを学びました。



整形外科のDr.Kaoと

どの珍しい症例を経験することができました。昼食の際にはスタッフの方々が誘ってくださり、医学教育や若者文化に至るまで多くの話題で盛り上がりながら、排骨便當（甘辛いタレで煮込まれた豚スペアリブがご飯の上に乗った、台湾で定番の弁当）などの美味しい台湾グルメをいただきました。

イギリスでの臨床実習、そしてドクターコール

医学科六年 佐藤 宗二 郎

この度、公益財団法人医学教育振興財団主催「英国大学医学部における臨床実習のための短期留学」プログラムを通して、イギリスNewcastle University, Royal Victoria Infirmaryにて一か月の臨床実習に参加してまいりました。

今回の実習を通じて、医療の多様性と国際的な視野の重要性を深く学びました。このような貴重な機会を与えてくださった先生方や関係者の皆様に、心より感謝申し上げます。



River Tyne

実習では、消化器外科と脳神経外科をそれぞれ二週間ずつ回りました。実習内容はおよそ日本と同じで、指導医とともに回診したり手術に入らせていただいたりしました。

また、低血糖、肺血栓塞栓症、感染症など鑑別疾患を考えながら英語で問診・診察をしたり、数に限りがある機内の酸素ボンベを考慮して緊急着陸するかどうかの判断に加わったり、コックピッドで地上の医師に

きましたが、ノイズの多い手術室で英語の指示を聞き取るのはなかなか大変でした。医師も医学生も多国籍で、育ってきた環境や文化背景が異なる人々が同じ医療現場で働いていることが新鮮に感じられました。



Royal Victoria Infirmary

公益社団法人 青森医学振興会

【沿革】 平成11年3月1日 弘前大学医学部医学科後援会贈税医学振興会発足（任意団体）
平成13年4月2日 社団法人青森医学振興会設立認可
平成24年4月1日 公益社団法人青森医学振興会へ移行認定

当会では、青森県の医学・医療の発展を促進するため、次の事業活動を行っております。

- 医学教育活動の活性化を図るための事業への支援
- 医学・医療の高度化に資する医学研究事業への支援
- 地域医療の振興に寄与する事業への支援
- 海外との学術交流等の活性化を図るための事業への支援

◎寄附のお願い

青森県の医学・医療の発展を促進するための各事業活動の一層の充実を図って参りたいので、皆様の格別のご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。随時、ご寄附を受付しております。

本会の公益目的事業に対する寄附金は、確定申告をしていただくことにより税制上の優遇措置の対象となります。

◎当会への入会のお願い

当会の事業活動に継続的にご支援・ご協力をいただける方は、ご入会くださるようお願い申し上げます。年会費は次のとおりとなっております。

会費	会員種別	年会費
	医学部教員 医学部卒業生等 賛同する個人 賛同する団体	1万円 2万円 2万円 10万円

◎ご支援ご協力いただける方のご連絡をお待ちしております。

▶【問合せ先】 公益社団法人青森医学振興会事務局
TEL・FAX 0172-40-2872
学内内線 6519
E-mail : info@aomori-mpm.jp

若手教員・医師だより

附属健康未来イノベーションセンター

助教 沢田 かほり

医学研究科附属健康未来イノベーションセンター先制医療学講座の沢田かほりと申します。私は、共創の場形成支援プログラム（COLNEXT）の枠組みの中で、地域住民を対象とした健診を運営し、得られたデータを学内外の研究者が活用できるよう整備したり、そのデータをもとに自身の研究や学生の研究指導を行っています。今回は、日々の健診業務を通して感じていることを述べさせていただきます。

当センターでは、①三千項目を超える健康ビッグデータを集積する「岩木健康増進プロジェクト健診（岩木健診）」、②全国八拠点からなる認知症コホートの一拠点として二〇一六年から十年計画で行っている「いきいき健診」、③メタボ・ロコモの包括的な検査に健康教育を組み合わせた「QOL健診」の三つを実施しています。

岩木健診は、三十以上の研究機関が参加し、テーマが重ならないよう調整しながらデータを取得しています。私の主な担当は健診運営ですが、得られたデータを将来の研究利用に耐える形で取得するためには、知財・契約、倫理、データ管理など多方面の課題に対応しなければなりません。そのため、健康未来イノベーション機構のURAや技術補佐員の皆様と協働して課題解決に取り組んでいます。課題が山積みで途方

族との時間をより大切に過ごしたいと考えるようになりました。

QOL健診は、若い世代に健康づくりへの関心を持ってもらうことを目的としており、職場やイベント会場などで実施しています。健康に無関心そうだった若者が真剣に話を聞いてくれたり、高齢の方と生活習慣について語り合ったりする場面もあります。健康づくりとwellbeingをどう両立させるかを考えながら、目の前の方が幸せに生活できる選択肢を示すことを大切にしています。

健診に参加くださる地域の皆様、そして日々の業務を支えてくださる多くの方々に心より感謝申し上げます。これからも、皆様と共に健康で幸せな未来づくりに貢献していきたいと思っています。

若手教員・医師だより

分子病態病理学講座

助手 佐々木 崇矩

医学研究科附属バイオメディカルリサーチセンター分子病態病理学講座の佐々木崇矩と申します。私は臨床検査技師であり、保健学科検査技術科学専攻（細胞検査士養成課程）を卒業後、すぐに当講座に所属し研究に従事しております。この度、寄稿の機会を頂きましたので、私の研究についてご紹介させていただきます。

当講座では主に糖尿病の病理を研究しておりますが、その中で私は「糖尿病性神経障害の病理の解明」をテーマとしています。病

不透明なのは組織に含まれる脂質や色素に光が散乱・吸収されるためです。これらを適切に取り除き、屈折率を調整することで、臓器は光を透過するようにになります。こうした「組織透明化技術」は現在、確立された技術として広く普及しつつあります。透明化された臓器は、ライトシート顕微鏡や共焦点レーザー顕微鏡などを用いることで、三次元的な観察・撮影が可能となります。しかし、そこで得られるデータはあまりに膨大です。そのため定量解析が難しく、従来の利用法は画像や動画として提示する「定性的」なものに留まりがちでした。

こうした背景に対し、私は「膨大な3DデータをAIに処理させることで、末梢感覚神経の細胞体容積を定量できないか」と考えました。昨今のAI研究の進歩を取り入れながら、独自にAIモデルを作成・改良し、一昨年に科研費（基盤研究C）の採択を受けることができました。

研究は思うようにいかないことも多く、壁にぶつかれることもあります。水上浩哉教授をはじめとした教室員の皆様の温かいご指導に支えられ、継続できております。この場を借りて御礼申し上げます。また、今後とも皆様方のご指導・鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

分子病態病理学講座

分子病態病理学講座 教授 水上 浩哉

現在、分子病態病理学講座は四代目の教授である水上、櫛引助教、佐々木助手、類家助手（病理部）、中国からの留学生である王先生、塗先生、小笠原技師、長内技師、坂本技師、今井事務員で運営されています。また、消化器外科科学講座から板矢先生他数名、内分泌代謝内科科学講座から樽沢先生、耳鼻咽喉科・頭頸部外科科学講座から三浦先生、小児科学講座から石山先生が学位研究のため当講座で研究を行っております。当講座の特徴は病理研究、診断の両方を高いレベルで行うことができることです。研究については病理学をベースとしたヒト組織と実験動物モデルを用いた糖尿病における膵臓、特に

膵島の変化、末梢神経障害をはじめとする合併症、糖尿病とがんに関する研究を行っています。病理検体だけではなく、実験動物、細胞も用いております。現在は網羅的な解析が当然となり、解析法も専門知識が必要とされ複雑化しております。なかなか大変です。また、病理学講座であります。本数は少ないものの「JCI insight」や「The Journal of clinical endocrinology & metabolism」などのインパ

クトファクターが高い雑誌に論文が掲載されました。また、国内外の複数組織と共同研究を行っており、今年度はScience Translation & Medicineに論文が掲載されています。糖尿病を病理学的に専門に検討している医学部の講座は国内にはないため、当講座の研究成果は国内外でユニークなものとして評価されており、その証拠としてスタッフ、大学院生とともに日本病理学会、日本糖尿病学会、日本臨床内分分泌病理学会、日本膵臓学会などから、また弘前大学から多くの研究賞を受賞しております。一方で、病理診断についても関連病院の先生方と協力して大学附属病院をはじめ、青森県、秋田県の複数の病院における病理診断を担当させていただいています。若手の先生の指導も関連病院の先生と協力し、単に診断ということだけではなく、病理研究を通じて、標本からその病態を推察できるような指導を行っています。このようにレベルの高い研究、病理診断を両方やりたい医学部生、研修医の方々に当講座に興味をもってもらえれば幸いです。今、基礎講座は人員削減や組織改編など過渡期にあり、大変な時ではありますが、引き続き成果をだせるよう教室員全員で精進していきたいと思っています。

研究室紹介



眼科学講座

眼科学講座 教授 上野 真治

眼科学講座は、大学発足当時から設置されており、七十年以上の歴史を有しています。二〇二二年に私（上野）が第四代教授として就任いたしました。現在、当講座には十六名の医師（うち教員六名）が在籍しています。眼科は日常診療の中でも特に手術件数が多い診療科であり、多くの医師が手術に強い関心を持ち、互いに切磋琢磨しながら技術の研鑽に励んでいます。

在では臨床研究が盛んに行われるようになりました。私が眼科医になった約二十年前には、眼内の網膜構造を多角的に評価することは困難であり、医師が主観的に所見を判断していました。しかし、光干渉断層計（OCT）の発展により、患者の網膜の微細構造を直接観察できるようになり、眼科診療は眼底検査主体からOCT主体へと大きく変化しました。それに伴い、研究も動物モデルを用いた研究から、患者の臨床画像を解析する臨床研究へとシフトしています。

弘前大学眼科の研究活動は、現在、所属する大学院生五名を中心に進められています。前教授の中澤先生の時代には、主にモデル動物を用いた実験的研究が行われ、高いレベルの成果が得られていました。私たちはその一部を引き継ぎ、近年、動物実験を再開しました。特に夜盲のモデルマウスであるRetinol Dehydrogenase（RDH）5ノックアウトマウスを用いた研究を行っており、このマウスは白点状眼底という疾患のモデル動物とされています。

臨床では説明が難しかった「なぜ白点が生じるのか」「なぜ網膜が変性するのか」といった疑問の解決を追求しております。臨床研究としては、私の専門分野である遺伝性網膜疾患、特に日本における失明原因の第二位である網膜色素変性の研究に取り組んでいます。赴任後は、原因遺伝子の同定に加え、各種画像検査を用いた病態の解明を進めています。その中でも、進化したOCTである偏光感受型光干渉断層計（偏光OCT）を用いて、従来は捉えられなかった網膜変性後の網膜の可塑性について研究を行っています。これらの研究成果により、将来的には人工網膜やチャネルロドプシンを用いた視覚再生治療の適応を見極めるための重要な所見を見出す。

総合文化祭（医学科展）を振り返る

弘前大学総合文化祭 医学科展代表
医学科4年 遠藤 彩加

肌寒さが増してきた十月下旬、総合文化祭で医学科展二〇二五を開催しました。今年は、昨年のQOL展二〇二四を振り返ります。研究はまだ始まったばかりで、手探りの部分も多い状況ですが、教室全体として着実に進歩していることを実感しています。今後は、現在の大学院生が将来教員として活躍し、新たな若手医師が入局することによって、屋根瓦式に教室を発展させていければと考えています。

健康、病理、外科、受験生応援、遊びに加え、救急、産婦人科、展示を新設しました。QOL健診は、弘前大学特別顧問の中路重之先生のご提案により、弘前大学生協学生会と連携し、弘大生によるQOL健診を行いました。病理は、顕微鏡観察と塗り絵を、外科は、糸結び、腹腔鏡・聴診器・医療器具展示、術着試着体験、手洗いチェックを行いました。受験生応援は、医学生へのメッセージ等掲示、個別学習相談、医療系の教科書・マンガ等

展示を、遊びは、スタンブラーやお菓子づくり、臓器輪投げ、ばい菌ボーリングを行いました。救急は、BLS体験とトリアーダタグ展示を、産婦人科は、妊婦エプロン体験を、展示は、人体模型展示と旧五輪選手の室伏由佳さんのサインやメッセージの掲示を行いました。

一昨年は動画放映のみで寂しいものでしたが、昨年の代表引継ぎを機に、医学科展刷新を目標に、大学の医学展の視察や過去のホームページの閲覧などからアイデアを収集し、構想・企画・実施準備を約三ヶ月で進め、老若男女が楽しめる体験型企画を充実させました。今年は企画の追加と広報強化、運営スタッフの勉強会を実施し、仲間と協力して活動の裾野を広げることができました。来場者数は千人超、スタッフ数は二十二人と、どちらも一



OB OG 書籍出版物の紹介 Vol.2 書評 中路重之

「医療落語：博士と助手の落話（おちばなし）36選」

著者：仲本光一 世論時報社（令和7年9月30日発行）

仲本光一先生。昭和58年弘前大学医学部を卒業された私の少し後輩です。国立横浜病院などで外科医として研修し、その後外務省のドクターとして活躍しました。今は岩手県県央保健所の所長として岩手県の保健行政の中心を担っています。その仲本先生がこの度医療落語の本を出版されました。聞けば、外務省勤務時代在留邦人のために医療情報の提供の意味を込めて書かれたそうです。

落語形式になっていますからどんな読み進んでしまいます。先生は、20年余にわたる外務省勤務時代、医務官としてミャンマー、インドネシア、インド、アメリカ（ニューヨーク）、タンザニア、カナダなどに赴任しておられます。ですから、インドネシア編、インド編、タンザニア編、カナダ編などのくくりになっているわけです。

確かに、ダウンタウンや中川家の漫才に比べると「うけ」は今一つかもしれません。それもそのはずです。本書の落語にはもう一つの使命があります。それは読者のヘルスリテラシーを高めるというものです。読み終わった時に、自然な形で健康や病気の知識が刻み込まれます。このような形でいろんな勉強ができたらどんなによいか、と思います。

感染症で名高い岡部信彦先生が帯で本書を絶賛していますが、その中にこう書いてあります。「随所にある“落ち”を見逃さず、慌てずゆっくりと読むことをお勧めします。」つまり、落ち着いた読み方は、“落ち”付いて読む、ということだそうです。

ジャズの演奏もやり、落語のシナリオを嗜む仲本先生が、今後も岩手県のみならず日本の保健行政の分野で大活躍されることを祈っています。



昨年の十倍以上に急成長を遂げ、会場は大賑わいでした。市役所や市内外の教育機関、塾、病院、各種施設にポスターを約三十枚配布し、ターゲットを意識した広報の効果も実感しました。令和四年からはスタッフ、令和六年からは代表として活動し、延べ千六百人以上の方々に医学知識を広めることができました。学生として微力ながらも、短命県返上に貢献できていれば幸いです。この取り組みを継承していきたいです。また、二年間駆けずり回ったことで、来場者や学生、先生との繋がりができ、貴重な財産になりました。開催にご協力くださった先生方、生協学生会、学務、学祭本部、スタッフ、ご来場の皆様に心より感謝申し上げます。来年度の医学科展の開催にもご協力いただきますと幸いです。

準優勝、秋季北医体では男子、女子団体いずれも準優勝、男子個人戦ベスト16、女子個人戦三位、四位入賞になります。

そもそもソフトテニスをご存じない方に説明してきますと、ソフトテニスは硬式テニスから派生し誕生した日本発祥の競技で、ボールがゴム製であることが特徴です。ソフトテニスは硬式テニスと比較して認知度は低く、硬式テニスの試合を見ることはあってもソフトテニスの試合を見る方は少ないでしょう。それでも、ソフトテニスの試合は基本ダブルスで個人戦、団体戦形式で行われており、自分のプレーに対する責任や、それに付随する仲間との信頼が芽生えるとい

(次ページへ続く)

（前ページより）
う点で、他競技に勝るとも劣らない魅力があると私は考えています。

さて、遠征の話になりますが、遠征は年三回（全医体出場者は年四回）あり、東医体では軽井沢、春季・秋季北医体では北海道、東北、新潟のいずれかに赴きます。遠征では試合に限らず、各地の風土に触れ、名所や食事を堪能すること、楽しいひとときを過ごしています。その他にも、お花見や海水浴、バーベキューといったイベントを通じて部員の親睦を深めています。もし当部に興味がありましたらお気軽に見学にいらしてください。

最後になりますが、平素の活動を支えてくださっている方々にこの場を借りて深く御礼申し上げます。

アントレ部

医学科四年 佐々木 慎一朗



弘前大学アントレ部部長の佐々木慎一朗です。この度は寄稿の機会をいただき、誠にありがとうございます。アントレ部とは、その名の通り「Entrepreneur」、いわゆる「起業部」です。「医学部生がなぜ？」とよく聞かれるため、本稿では活動内容そのものよりも、私たちに、部員一同、感謝を忘れず部活動に取り組んでまいりますので、今後ともご支援のほどよろしく申し上げます。

ちを突き動かす動機と、そこで培われる「感性」についてお話しします。

私は昨年度、インドのベンチャーキャピタルで勤務しながら、米英にも渡航し、ヘルスケアスタートアップの動向を調査する機会を得ました。特に米国のハーバードやMIT、英国のケンブリッジといった

トップスクールの学生たちと交流し、彼らの圧倒的な「社会実装力」に強い感銘を受けました。

例えば米国のMITでは、学生が研究で得た知見を手にも市長へ直談判し、研究資金を獲得するといった行動が当たり前起こっています。MITの彼らは、今ある社会を受動的に生きることをもったいないと捉えています。学生である彼らが身の回りで起きた現象に対して感じるその違和感は、理屈ではなく「感性」の問題です。多くの人が、例えばイーロン・マスクを見て「すごい」と憧れるだけで終わるところを、彼らは「自分もやる」という感性で捉えている。人生を通じて人類の地平を切り拓くような、誰もできなかったことを成し遂げたいと本気で思っているのです。

「この1冊からはじめる肺聴診の手引き」

田坂 定智
（呼吸器内科学講座 教授）

このたび、医療従事者、学生の皆様に向けた実践的なガイドブック『この1冊からはじめる肺聴診の手引き』を刊行いたしました。聴診は、画像や血液検査でも得られない生体情報を得られる技術であり、呼吸器疾患に限らず日常診療において非常に重要な役割を果たしています。本書

書籍のお知らせ

籍は、呼吸器診療において基本でありながら習得が難しい肺聴診技術を、初学者でも理解しやすいように解説した入門書です。聴診器の当て方や聴診部位、身体診察などの基本知識から、異常呼吸音の



発生メカニズム、肺音の特徴、各疾患に特徴的な所見まで、肺の聴診に関する知識が分かりやすくまとめられています。また本文中のQRコードから音源や動画に簡単にアクセスできるようになっており、実際の症例や肺音所見に触れて病態把握・診断の実践的な理解を深められるように工夫されています。本書は肺音（呼吸音）研究会で毎年開催している肺聴診セミナーの講師陣が中心となって執筆しており、医師やメディカルスタッフ、学生など、聴診器を持つすべての方に手に取っていただきたい一冊となっています。

「われらは、テクノロジー・ビジネスなどあらゆる手段をもって国民の健康の保持増進及び医療の持続的発展に寄与する」これが弘前大学アントレ部の挑戦であり、私たちが考える「医師法一条の三」です。

人事異動 (R7.9.1～R7.11.30)

●医学研究科所属

【昇任】

発令日	所 属	職 名	氏 名	前 所 属
R7.10.1	消化器血液免疫内科学講座	准教授	菊池 英純	地域医療学講座 講師
R7.10.1	脳神経外科学講座	講師	片山 耕輔	脳神経外科学講座 助教
R7.10.1	地域医療学講座	講師	蓮井 桂介	附属病院 消化器内科、血液内科、免疫内科 助教
R7.10.1	総合地域医療推進学講座	助教	佐々木 貴夫	総合地域医療推進学講座 助手

【採用】

発令日	所 属	職 名	氏 名	前 所 属
R7.10.1	耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座	教授	鈴木 真輔	秋田大学大学院医学系研究科 耳鼻咽喉科 頭頸部外科学 准教授
R7.10.1	呼吸器内科学講座	助教	小堀 由璃	附属病院 呼吸器内科、感染症科 病院助手
R7.10.1	胸部心臓血管外科学講座	助手	田口 亮	弘前中央病院
R7.10.1	眼科学講座	助手	一戸 寛	附属病院 眼科 病院助手

【配置換】

発令日	所 属	職 名	氏 名	異 動 先 等
R7.11.1	内分泌代謝内科学講座	助教	水尻 諭	附属病院 内分泌内科、糖尿病代謝内科 助教

【辞職】

発令日	所 属	職 名	氏 名	異 動 先 等
R7.9.30	耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講座	助教	三橋 友里	附属病院 耳鼻咽喉科頭頸部外科 医員
R7.9.30	バイオメディカルリサーチセンター（分子細胞病理学）	助手	龍崎 正樹	千葉県健康福祉部
R7.10.31	内分泌代謝内科学講座	助教	遅野井 祥	Children Hospital Medical Center

お悔やみ

弘前大学名誉教授（元脳神経外科学講座教授）大熊洋揮 氏には、令和七年十一月十五日に逝去されました。行年六十九歳
ここに、謹んで哀悼の意を表し、御冥福をお祈りいたします。



編集後記

今年度最後の医学部ウォーカーをお届けします。今年はJ-PEAKSに採択される一方、基礎講座の人員削減、講座再編、昇進基準の策定など非常に重い事項で一年が過ぎていった感じでした。

J-PEAKSの採択により研究大学という位置づけになり、基礎講座は研究大学の屋台骨を担うという意味でもさらなる飛躍が期待される場所です。また、今年は熊の被害が特に東北、北海道でクローズアップされた年でした。秋田県では病院で熊の侵入を阻止するために玄関を自動ドアから手動に変えたり、児童の送り迎えが必要になったり、街中でも熊対策は喫緊なものになっております。かくいう私も某駅ホームで電車を待っていたところ、目の前五メートルくらいのところで一メートル超くらいの熊がホームと線路を横切り、林に消えるというところを経験しました。目の前の熊はかわいいというものではなく、どう見ても猛獣でした。もし熊が方向を変えてこちらに来ていたらとんでもない事態になっていたかもしれない。翌日の地元紙に某駅ホームに熊現れる、と記事が載っており、待合客（私を入れて三人くらい）が急遽避難したと書いていました（全く避難していません）。熊がこちらに来なかったことを僥倖とし、来年度も頑張っていきたいと思えます。